

私を変えた優しい鬼

宮城県仙台市立台原中学校

二年 阿部 聖 菜

私は小学校低学年の頃、先生に怒られてばかりだった。今思い返してみると何故だか分からないが、授業や学校行事、課外学習、どれもどこか大人に縛られているようで気に入らなかったのだ。

「先生にやらされているだけ。」
そんなことばかり考えるようになった。先生に反抗する毎日だった。

そんな私を変えたのは、一人の先生だった。小学校も五年目になり、もうすぐ最高学年というところだった。

「六年生を見習い、最高学年に向けて準備をしてくいませう。」

始業式で今年の抱負を発表した同級生の言葉に、私は一人嫌悪感を抱いていた。そんなことを言っても何も変わることは出来ない。友達の発表を聞き流すだけで、何も感じなかった。抱負の発表も終わり、新しく着任した先生たちの紹介が始まった。新しい学校で初々しく話しをする中、一人違った雰囲気先生の先生がいたのだ。

「人は変われます。出来ない、変わらないと悩んでいる人がいたら、私を変えてみせます。」
力強い声だった。私より背が低く、女の先生だった。

が、私の考えと正反対、変えてみせますと無責任なことを言うその先生に、私は少し苦手意識をもってしまった。それからその先生とは関わりがないまま、変わらない一年が過ぎていった。

そして小学校生活最後の一年。周りの友達はあるな中学校に向けて準備を進めている中で、私はまだ何も出来ていないままだった。そして、私が苦手意識をもっていたあの先生が学級担任になったのだ。あの先生か。と思ってしまう私がいた。やっぱり最高学年となると、去年とは違った雰囲気だった。力強い先生の怒鳴り声も、よく聞くようになった。私もたくさん怒られた。何度も怒られた。それとともに、その先生への苦手意識もどんどん強くなっていった。そして私に変わるチャンスが訪れたのは学芸発表会の時だった。それぞれの学年が曲を演奏したり、合唱曲を歌い、本番に向けて練習に取り組んでいた。いつものように練習をしていると、私は先生に呼ばれ、教室から出た。

「学芸会の閉会の言葉を発表してみない？」
小学校生活最後の学芸会。みんなの前で話すなんて出来るわけない。そう思った私は、一緒に呼ばれた友達の反応を待っていた。
「しません。」

そうはつきり断った友達は、すぐ席に戻ってしまった。残されたのは私一人。思いきって断わろうとした。すると、先生は口を開いた。

「先生ね、これがあなたが変えられる最後のチャンスだと思ってるの。やってみない？」
そう、優しく先生は話した。私が変われる最後のチャンス。

「私を変えてみせます。」
先生が始業式で言った言葉を思い出した。
「やってみます。がんばります。」

先生の言葉を信じてやってみよう。私はそう心に決めたのだ。閉会の言葉の練習は思っていた以上に厳しかった。

「声が出てない！」
声を出すのが苦手だった私。先生にたくさん怒られたが、「変わってやる」という思いが強く、負けなかった。そして迎えた本番の日。緊張で心が押しつぶされそうだった。そんな私を見て、

「大丈夫。あなたなら出来る、がんばれ」
と先生は笑った。あんな鬼のようだった先生が、その時はとても優しく見えた。発表をしている時、先生と練習したことを思い出しながら、ゆっくりはつきり話すように心がけた。先生は私の目の前で応援してくれていた。

そして本番は見事大成功。終わったあと、友達が「よかったよ」「すごいじゃん」と、たくさんほめてくれた。そして、先生は、
「すごかったよ。やれば出来るじゃん。」

と、笑った。優しい鬼はそっと、私の頭をなでた。嬉しかった。変われないと思っていた私は、変わることが出来たのだ。私はその場で泣いてしまった。

それからの学校生活は、毎日楽しかった。いろいろなことにチャレンジした。小学校卒業までもっと変わろう。そう考えると、何事にも自信がついたのだ。そして今、私は中学二年生となった。毎日、嬉しいことや泣きたくなくなるようなことがたくさんあるが、私は、これからも変わっていきけるよう日々努力している。

あんなに大嫌いだった先生。でも今では大好きな先生へと変わった。私に力をくれてありがとう。「負けるな」怖くて優しいその声で私は変わることが出来たのである。そんな優しい鬼に、たくさん感謝して、今日も私は少しずつ変わっていく。